

『「メディカルヴィレッジ」 ～ 1人の人間を癒す ～』

2023年1月2日、wifeと筆者が19歳の京都時代に大変お世話になった今は亡きご両親の娘様ご夫妻が在住の神奈川県金沢文庫駅に赴いた。ご両親が存命中から、毎年正月に訪問したものである。父親は筆者の故郷（島根県出雲市大社町鶴峠）生まれで筆者の母の従兄弟、母親は隣村（出雲市大社町鷺浦）生まれで父の妹である。筆者にとって大切な繋がりである。妹様ご夫妻、息子様ご夫妻も参加され、大変有意義な貴重な時であった。『鶴鷺＝（鶴峠 and 鷺浦）Medical Village』構想で、大いに盛り上がった。『NIPPONIA 出雲鷺浦』のHPも見せて頂いた。【『鶴鷺メディカルビレッジ＝1人の人間を癒す為には1つの村が必要である』&『メディカルビレッジ＝医療の隙間を埋める＝医療の協働体』】の時代的到来である。【『古いものには、まだ再活用される要素があるのである』（内村鑑三;1861-1930）、『最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである』（新渡戸稲造;1862-1933）】を痛感する年始である。

筆者のブログを読まれた2018年沖縄の伊仙町で『第1回日本メディカルヴィレッジ学会・生涯活躍のまち共催シンポジウム in ISEN』を開催された（第1回日本メディカルヴィレッジ学会 - 奄美新聞）南郷辰洋氏から【「感動して読まさせていただきます。伊仙町メディカルビレッジ構想構築に向け大久保町長と共に走り回っています。」】また、都内の出版局に勤務の方からは、【樋野先生のメディカルビレッジを目指すこととなった原点をあらためて拝読し、年始にあたって自分自身もメディカルカフェとのかかわりを思い返しています。】との心温まるメールが届いた。大いに感激した。筆者は、『日本メディカルヴィレッジ学会』理事長を拝命し、『日本メディカルヴィレッジ学会』のHP（新渡戸記念中野総合病院）には、【『日本Medical Village学会』設立の目的は、がん患者さんが最期まで安心して暮らすことが出来る場所(Medical Village)を地域に創ることです。Medical Villageとは、がん患者さんを癒すことのできる村です。がん患者さん本人だけでなく、本人に関わる家族や友人や、本人を支援する医療や介護の従事者にとっても安心できる場所になることを目標にします。】と謳われている。今年(2023年)第6回『日本メディカルヴィレッジ学会』は、山梨県甲府市で開催予定である。